

鶏の網膜症 (Retinopathy)

後藤解卵場病理研究室出題：第8回獣医病理学研修会標本No. 113



1966年秋から1967年春にかけて九州、中国および関西地方に視力障碍（盲目）を主訴とする鶏の疾病が発生した。しかも、これら発症は或種のチックフード使用に密接な関連を持つものと看做された。われわれが取得した28例（実験例を含む）から研修会出題例の主要眼病変について以下要約する。

臨床的事項

鶏：兼用種，♀，86日令，飼育地岡山。

本群は1967年4月5日 100羽餌付（バタリー飼育）。

1週令頃から元気なく、2週令時約30%に視力障碍（盲目）を示していることに気付いた。その後、30日令になってなお拾数羽が発症した。このときの13羽が当研究室へ送付され、約40日間観察飼育した。症状は好転せず、むしろ全盲に近い状態となった。（出題例はこのうちの1羽）

眼症状：眼球は軽度突出していたが、瞳孔、虹彩、角膜などには明らかな可視的変状は認められなかった。餌箱や飲水器などの位置の識別は全く不可能であった。

尚、本症の発生は性別に無関係で、主にブロイラー（肉用）に発生するようであった。

剖検所見：

体格中、栄養やや不良、病変は眼に限定されていた。すなわち、1) 硝子体の高度の液状化、2) 網膜の浮腫および部分的剥離 (ablatio retinae)、3) 網膜全域にわたる高度の色素欠如 (脱色)。

Fig. 1 は眼球底の肉眼病変。網膜の浮腫、広汎な色素欠如が顕著である。

組織所見：

網膜全層にわたる高度の変性々事象を主病変とするものである。とくに、杆状体および錐状体層と顆粒層の変性崩壊および脱落が著明。時に Cystoid degeneration があり、eosinophilic debris を認める。色素細胞も極度に消失欠如している (Fig. 2)。Fig. 3 は Fig. 2 の強拡大、視束繊維層から色素層にわたる種々なる変性崩壊を顕す。Fig. 4 (強拡大) は顆粒層および杆状体および錐状体層における高度の変性崩壊像。

なお、中枢神経系に異常は認められなかつたが、末梢神経系においては、軽～中度の神経繊維の変性脱落 (多発性神経炎) が指摘された。しかもこのような変化は、眼底および眼壁在諸神経 (毛様体神経節を含む) 枝においても確実に認められた。

以上のごとく、本例は眼病変、とくに網膜全層における高度の変性々事象が指摘されたが、かかる網膜病変に関する命名は多種多様である。今回の場合、網膜の特定層にのみ病変が限定せず全層におよぶことなどから、かかる網膜の退行性病変が Retinopathy syndrome の範疇に入れられるものと思う。詳細な病変分析などについては今後の検索にまきたい。